



主な内容

- | | |
|--------|--|
| 特集 | 医療系認定資格取得者の紹介 |
| 活動報告 | 平成30年度北海道胆振東部地震における災害支援活動 |
| トピックス | 平成30年度岩手医科大学秋季卒業式が行われました |
| フリーページ | すこやかスポット薬学講座No.13
「中央アジアのタジキスタンにおける漢方薬の原料植物の調査研究」 |

表紙写真：盛岡秋まつり 八幡下りパレード (2018.9.14 撮影)

医療系認定資格取得者の紹介

本学附属病院は岩手県で唯一の特定機能病院であり、地域医療の中核として高度医療の提供という重要な役割を担っています。そのため当院で働くスタッフには高い専門性が求められ、医療系認定資格取得者も多数在籍しています。

そこで今回の特集では、薬剤部と栄養部の認定資格取得者の方から、その役割や活動内容等について紹介していただきます。

がん専門薬剤師／がん薬物療法認定薬剤師

薬剤部 製剤室・外来化学療法室 薬剤師 二瓶 哲

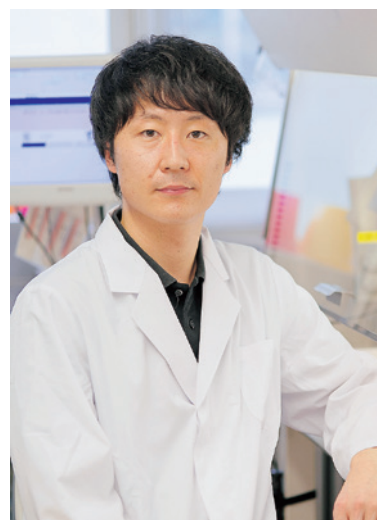
近年、抗がん剤治療はより高度に専門化・複雑化しており、今までの抗がん剤と作用機序の異なる分子標的薬の登場や、それらによる重篤な副作用もみられるようになったことから、薬剤師の重要性がますます高まっています。このような現状で患者さんの安全性を確保するためには、高度な専門知識や技能、経験を有する医療スタッフがチームとして治療にあたらなければなりません。

現在、抗がん剤治療の多くは入院から外来に移行しており、外来通院しながら治療を受ける患者さんが増えています。そのため、患者さんが自身の治療を十分に理解し、重篤な副作用を回避するためのセルフケアを在宅で行うことが必要不可欠となります。当院の外来化学療法室では、外来患者さんへのサポートを充実させるため、初回時の薬剤指導、継続的な副作用アセスメント、多職種でのチームカンファレンスなど、安全かつ効果的に抗がん剤治療ができるよう環境を整えています。

また、平成 26 年度の診療報酬改定に際し、「がん患者指導管理料3」が新設されました。これは外来にて薬剤師が

抗がん剤の投薬または注射の必要性等について文書により説明を行った場合に 200 点が算定できるというもので、がん治療における薬剤師の専門性とこれまでの実績が診療報酬の形で評価されたものと言えます。

このほかにも副作用対策に関する処方提案や院内の抗がん剤曝露対策など、医療現場でがん専門薬剤師に求められる役割は多数ありますが、今回は簡単な資格の紹介と院内の活動として化学療法の治療計画（レジメン）の管理、院外の活動として化学療法チーム研修会について、述べさせていただきます。



がん専門薬剤師の資格について



現在当院では、がん、感染、HIV、妊婦・授乳婦などの 12 分野 22 人（重複あり）の認定薬剤師が活躍しています。がん専門薬剤師は、がん領域における薬物療法等についての高度な知識と技術を用いて、医療機関において質の高いがん薬物療法を実践する薬剤師として、現在「広告標榜」が可能な唯一の薬剤師専門資格です。2018 年 1 月現在、全国のがん専門薬剤師認定者数は 578 人となっており、このうち岩手県では 3 人の薬剤師が認定されています。

院内の活動：レジメン管理

院内で行われるレジメンは、科学的根拠の評価が極めて重要であり、当院において実施可能か否かの適正な審査・承認を、レジメン審査委員会により受けることで初めて患者さんに実施できるようになります。レジメン審査委員会は、がん化学療法に精通した医師・看護師・薬剤師などで構成されており、各診療科から申請されるレジメンが適正であるか、申請書や参考論文をもとに審査しています。

レジメン管理の目的は治療の標準化、予測される有害事象の回避あるいは軽減、そして医療ミスや事故の防止にあり、「承認されたレジメンをそのままファイルに閉じたり、電子カルテに登録したりといった整理・整頓業務」のことではありません。レジメン管理の業務は、①レジメンの標準化、②支持療法・輸液などの標準化、③承認後のレジメン再評価、④不要レジメンの整理などから構成され、病院全体のシステムとして運用されています。このためには、厳格なレジメン管理と柔軟な対応が同時に求められます。各診療科が個々で行っている治療の動向を把握し、ならびに国内外の最新情報を入手することで定期的な評価と見直し、さらに最適なアップデートを行っています。

新たなレジメンが医師より申請される場合には、事前に薬剤師が窓口となり、抗がん剤治療を行う全診療科に対応したサポート体制をとっています。主な内容は、レジメン骨格の設計です。その際には、抗がん剤の適正使用の確保、

副作用を最小限に抑えるための方法、そして外来あるいは入院治療に応じた治療スケジュールなどに重点を置き、投与量、投与速度、輸液の種類、プレおよびポスト Medikationなどを薬学的観点から提案しています。また、血管外漏出の軽減や医療ミスを防止する観点から、実際に患者さんに投与される看護師の意見も大変重要です。

レジメン作成時は論文や添付文書等に記載されている情報だけでは判断に悩むことも少なくありませんので、不足している情報に対しては、チーム医療を活用した豊富な知識や経験をもとに補完させることも必要であると考えています。



院外の活動：化学療法チーム研修会の開催

当院は、岩手県で唯一の都道府県がん診療連携拠点病院であり、がん医療均てん化の推進、岩手県内のがん診療連携協力体制の整備等の役割を担っています。そこで、私を含めた当院の医師、薬剤師、看護師、医療ソーシャルワーカーの4人が、岩手県内のがん化学療法のレベル向上を目指した研修会を企画し、開催しました。本研修会は、岩手県がん診療連携協議会主催で、平成27年度より毎年開催しております。

近年の抗がん剤治療の進歩に伴い着実に生存期間の延長を認めるようになったことで、患者さんご家族にとって、がんと共存したよりよい生活を目指すことが目標となってきました。このような変化とともに医療者側は最適なケア

を実践するため、医師、薬剤師、看護師、医療ソーシャルワーカーなどの多岐にわたる専門スタッフがチームを組み、身体的・社会的・心理的な問題に対しサポートを実践することが重要となっています。本研修会では、県内から多くの施設や職種に参加いただいております。専門的な知識や技能の習得に加えて、施設間のコミュニティとしても役立っております。交通の便が悪いという地理的条件がある岩手県などの地方にこそ、多職種、多診療科、さらに多施設によるハイブリッド型チームを構築していく必要があり、がん専門薬剤師がそれらを連結させる橋渡し役になるべき存在であると考えています。

最後に

薬剤師は、薬のことは何でも知っているジェネラリストを基本に、何かの分野を徹底的に極めるスペシャリストへの変革期を迎えています。これは日々変化する時代に即し、さらに将来を見据えた医療需要に応えるために、各領域におけるチーム医療の進展とともに薬剤師にもより高度な専門性が求められるようになったことが背景にあり、今まさに薬剤師の「新化」が問われています。今後、チーム医療の成長とともに、私たちもますます成長できるよう頑張っていきたいと思っています。

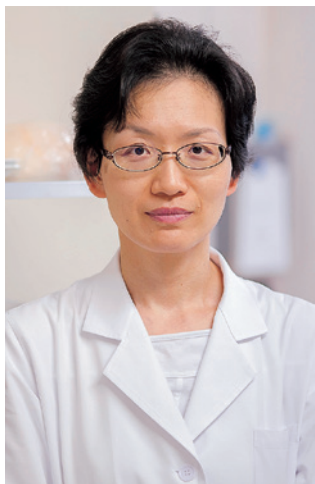


第1回 化学療法チーム研修会 (平成27年度)

栄養サポートチーム (NST) 専門療法士

栄養部 主任栄養士 俵 万里子

栄養サポートチーム (NST) 専門療法士の役割



今回紹介する栄養サポート専門療法士は、日本静脈経腸栄養学会が規定する認定資格で、「主として静脈栄養・経腸栄養を用いた臨床栄養学に関する優れた知識と技能を有している」管理栄養士、看護師、薬剤師、臨床検査技師、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士、および歯科衛生士に与えられるものです。当院の NST コアスタッフも看護師 6 名、薬剤師 2 名、管理栄養士 2 名の計 10 名が資格を取得しています。

栄養療法はすべての疾患治療に共通する基本的な治療の一つです。適切な栄養療法がなされなければ、いかなる治療もその効果を得ることが難しくなります。逆に、不適切な栄養療法は大きなリスクとなります。栄養療法の重要性が認知されてきた

1990 年代後半より、病院に NST が設立されるようになり、当院では 2004 年に設立されました。

当院の NST は、医師、歯科医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床検査技師、歯科衛生士、言語聴覚士、理学療法士、事務員が構成メンバーです。各専門職が自身の専門分野を活かして、知識・技術・患者情報を持ち寄り、主治医から依頼された栄養障害を生じている患者さん、または栄養障害を生じるリスクが高い患者さんに対して、全身状態を総合的に評価し、経口、経腸、経静脈栄養の中から適切な栄養補給ルート、必要栄養量、食形態や栄養剤・輸液の種類を検討し、栄養状態を改善するためにチームで取り組んでいます。



〈写真上〉

前列左から：西村教授（リハビリテーション医学科）、柿澤看護師（中 6 階）、筆者
後列左から：関向看護師（循環器 ICU）、栗谷川看護師（中 9 階）、佐藤看護師（西 4 階）

〈写真下〉

左から：朝賀薬剤師（薬剤部）、藤江薬剤師（薬剤部）

院内の活動

① NST ミーティング

毎週火曜日に NST 依頼患者を対象に、コアスタッフによるミーティングと回診を実施しています。コアスタッフは、各職種専門性を生かし、依頼があった患者さんの情報を収集し、栄養管理上の問題点の抽出と情報の共有を行い、栄養プランを立案します。転院時には、転院後も継続的な栄養管理ができるように栄養管理情報提供書を作成しています。



② NST リンクナース会

栄養管理について情報共有や職員への啓発活動のために月 1 回開催しています。

③ NST 勉強会

職員の栄養管理の質の向上を目指し、年数回開催しています。平成 30 年度は、第 1 回は薬剤部から簡易懸濁法について、第 2 回はリハビリテーション科の西村教授からリハビリと栄養についての講演をいただきました。

④ 栄養管理に関する問い合わせへの対応

輸液・栄養剤・食形態等栄養に関する質問や相談にも随時対応しています。

⑤ 研修生の指導

当院は、NST 専門療法士受験者の研修施設に認定されているため、院内外より研修生を受け入れ、NST 専門療法士が指導を行っています。本年度までに他施設より 19 名の研修生を受け入れました。

おわりに

予後の改善や入院期間の短縮のため、栄養管理でも多職種連携の強化や地域連携の推進など、“点”ではなく“面”での取り組みが更に重要になってきています。院内外との連携を強化し、より良い栄養管理が提供できるように努めていきたいと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。



医学部睡眠医療学科の櫻井 滋 教授らの研究グループは、革新的医療機器等開発事業による株式会社小池メディカル、株式会社メトラン及び株式会社イワテシガとの共同研究において、災害や電源喪失時に対応する睡眠時無呼吸症用医療機器を開発し、医療機器製造販売認証を受けましたのでお知らせします。

1 製品概要

(1) 名称

一般的名称 持続的自動気道陽圧ユニット
予定販売名 FLATBOX（フラットボックス）

(2) クラス分類

Ⅲ（高度管理医療機器）

(3) 申請者名

株式会社メトラン

(4) 承認年月日

平成 30 年 6 月 26 日

(5) 使用目的、効能又は効果

CPAP（Continuous Positive Airway Pressure）と自動CPAPの2種類のモードで作動する睡眠時無呼吸症候群患者等の携帯型治療装置として使用されます。



(6) 製品の特徴と新規性

睡眠時無呼吸症候群に対する医療機器である既存のCPAP 機器は、安定した商用電源の使用を前提とします。しかし、開発製品〈FLATBOX〉は電源を本体に内蔵し、通常は家庭で充電しながら用い、災害時や外泊時には本体のみを持ち出すことで、商用電源が得られない就寝環境でも治療を継続することができます。また、使用者自身の携帯電話と近距離無線通信することにより作動状況を即時に把握できます。

2 製品化の経緯

CPAP は無呼吸症治療では患者にとって欠くことができない治療機器ですが、治療効果の確保には十分な使用時間と使用頻度を維持する必要があります。治療必要性（治療を続けたいという意味）があるにもかかわらず adherence* が不良となる要因として、機器の「可搬性」と「電源確保の問題」が挙げられます。

典型例としては長距離トラックの乗務員等、商用電源が得られにくい場所での睡眠を余儀無くされる、出張・移動時における電源許容性の低さは治療中断の重大要因です。さらに自然災害に伴う停電時や避難時には、可搬性や電源許容性の低さに加えて、医療以外には用いることのできない特殊な機器として扱われるなどの理由から「非常持ち出し」の対象になりやすく、治療中断を選択せざるを得ない状況があることが、岩手医大が行なった東日本大震災時における多数例の調査から明らかになっており、大規模災害時であっても最大限の供給努力がなされた「内服薬による医療」と比較し不公平感が否めません。今般の北海道胆振東部地震でも同様の問題が提起されています。

これらの問題を解決するためにはユビキタスな医療（遠隔医療）を可能とする代替的な療養環境の提供や支援手段が待たれています。

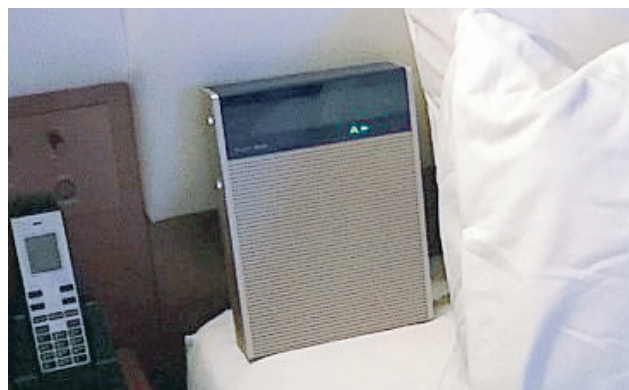
* adherence：患者が積極的に治療方針の決定に参加し、その決定に従って治療を受けること。

3 当機器が備える主な仕様

- 天地自在な機器の設置条件と動作の安定性
- シンプルな透過型アイコンによる作動状態表示
- 自動起動、自動停止機能による簡便な治療体験と操作性
- 充電池内蔵で商用交流電源喪失時でも治療継続可能な仕様
- 最大部でも JIS B5 版相当の投影面積と 6cm × 19cm の最小設置面積
- 治療圧の変化と連動して自動調光される睡眠覚醒を支援する照明機能搭載
- 近距離無線通信機能を備え、作動データの出力及び設定データの確認可能
- 治療情報確認や機器設定のための USB ポートと SD カードスロットを装備

4 開発者のコメント

医療機器としてはユニークな形状の「高品質なアルミ筐体」に「多彩な療養機能」を収めた機器が、健康保険の適用が可能な機器として国に認可された意義は極めて高いものと考えられ、岩手発の発想と技術が多くの「移動する患者」や「災害時の医療環境」にとって福音をもたらす医療機器となるものと考えられます。今後は安定した製造や流通環境の整備が課題となります。



岩手医大 DMAT の活動〔Disaster Medical Assistance Team〕

救急・災害・総合医学講座救急医学分野 山田 裕彦

期 間／平成 30 年 9 月 6 日（木）～ 10 日（月）

場 所／むかわ町穂別地区、日高町

隊 員／【医 師】山田裕彦（救急・災害・総合医学講座救急医学分野 准教授）

秋丸理世（救急・災害・総合医学講座救急医学分野 助教）

【看 護 師】齊藤麻知子（看護部岩手県高度救命救急センター 主任看護師）

【業務調整員】高圓宰（薬剤部 薬剤師）、千葉健太（臨床工学部 臨床工学士）

【運 転 手】小笠原明久（総務部庶務課 自動車運転手）

活動概要

2018 年 9 月 6 日（木） 3 時 8 分に発災した胆振東部地震では、岩手医大より 3 隊の DMAT 関連チームが出動した。そのうちチームとして出動したわれわれの活動を報告する。

発災を受けて 3 時 51 分に DMAT 事務局より待機要請メールが届いた。被害状況はよく分からず、夜明け後の報道映像を確認後に本学附属病院へ集合し、6 時 30 分には出動可能として準備を開始した。14 時 18 分に DMAT 事務局より派遣要請が出され、7 日（金）の朝に宮古港からフェリーで出港した。同日 18 時に室蘭港に到着、20 時に参集拠点である苫小牧市立病院に到着した。この日は夜間のミッションは無く、翌日 8 時 30 分からの活動となった。

8 日（土）は、むかわ町穂別地区の避難所のサーベイ*となり、山形県立置賜総合病院チームと二手に分かれてサーベイを行った。穂別診療所は断水しているが診療可能な状況であった。電気は復旧し始めており、携帯は au が通じていて、断水が続いていた。日中避難者は少なく、夜になると集まってくるとのことで、車中泊がみられ、段ボールベッド、手指消毒薬、ストッキングが必要と思われた。

9 日（日）は、日高町の避難所のサーベイとなり、こちらも穂別地区と同様の状況であった。サーベイ終了時点で、DMAT 本部から保健所への引き継ぎが行われ、DMAT 本部は撤収し、14 時活動終了となった。同日 23 時 59 分発のフェリーで苫小牧を出港し、10 日（月）12 時に帰還した。

被災地の皆様のより早い復興を願っております。また、われわれの活動中に岩手医大で後方支援をしていただいた皆様に感謝申し上げます。

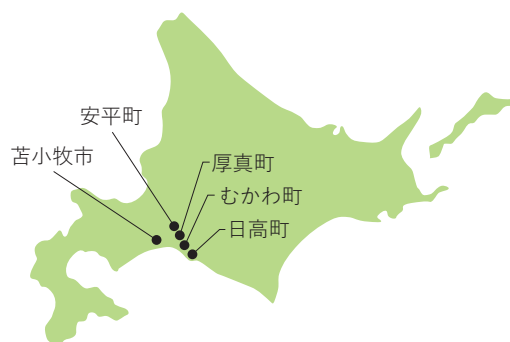
*サーベイ：病気の広がり状況等を観察すること。



むかわ町穂別総合支所での活動



穂別町民センターでの活動



※岩手医大 DPAT（Disaster Psychiatric Assistance Team：災害派遣精神医療チーム）の活動報告は、岩手医科大学報 11 月号に掲載いたします。

岩手医大ロジスティックチームの活動

救急・災害・総合医学講座災害医学分野 藤原 弘之

期 間／平成30年9月6日（木）～12日（水）

場 所／苫小牧市立病院、厚真町総合ケアセンター

隊 員／【医 師】眞瀬智彦（救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授）

【業務調整員】藤原弘之（救急・災害・総合医学講座災害医学分野 助教）

奥野史寛（学務部矢巾キャンパス教務課 事務員）

活動概要

9月6日（木）に発生した北海道胆振東部地震により北海道の広い範囲が甚大な被害を受けた。人的被害は死者41人、重傷13人、軽傷679人（内閣府発表、9月20日（木）時点）と被害の大きさをうかがわせる。また広範囲でライフラインが途絶し多くの医療機関も被災した。

このことより発災直後にDMATはもとよりDMATロジスティック*チーム（以下、ロジチーム）の出動も決定した。ロジチームとして岩手医大からは救急・災害・総合医学講座災害医学分野の眞瀬教授をはじめとする医師1名、業務調整員2名がすぐさま被災地入りした。岩手医大ロジチームにまず課せられた任務は苫小牧市立病院内に設置されたDMAT活動拠点本部の運営および通信途絶地域調査であった。この本部は最も被害が大きい地域を管轄していたことより、医療機関や避難所のアセスメント、救護班派遣において複雑な調整を余儀なくされた。発災4日目となる9月9日（日）には東胆振地域全体の急性期的な医療ニーズは収束傾向となったことから苫小牧市立病院内のDMAT活動拠点本部を閉じ、保健医療支援の拠点を震源地に近い厚真町へ移した。翌9月10日（月）からは厚真町総合ケアセンター内に“東胆振東部3町医療救護保健調整本部”（以下、3町調整本部）を立ち上げ、保健所を中心とした体制で被害が甚大であった厚真町・安平町・むかわ町の3町の保健医療支援活動を継続した。岩手医大ロジチームとしては、DMAT活動拠点本部に引き続き3町調整本部業務の運営に携わり、9月12日（水）の活動をもって撤収した。

今回の災害対応の特徴としては、ライフライン途絶が医療機関にもたらす影響が顕著であり、急性期は医療機関の機能も含めたニーズのアセスメントに奔走した。また過去の災害同様に、保健所を中心とした体制つまり今回で言う3町調整本部の重要性を再認識した。いずれにしても急性期という最も活動が複雑なフェーズにおい

て岩手医大ロジチームとして被災地で尽力できたことは我々自身にとっても得るものは多々あった。短い期間ではあったが我々の活動が被災地の方々の一助となれば幸甚である。

最後に、現地ではいまだに避難所生活を強いられている方もおり災害対応が継続中である。災害関連死も含めた2次被害が拡大しないことを祈念するとともに、お亡くなりになられた方々へ哀悼の意を表す。

*ロジスティック：一般的には、物流の調整・管理のことであるが、災害医療分野においては診療や医療処置以外の本部運営や情報通信、後方支援などを意味する。



DMAT活動拠点本部ミーティング



東胆振東部3町医療救護保健調整本部

高度看護研修センター 創傷管理関連 特定行為教育課程修了式が行われました

8月27日（月）、創立60周年記念館10階会議室において、高度看護研修センター創傷管理関連特定行為教育課程の修了式が行われ、昨年9月から1年間の研修を修了した5名の研修生が寺山センター長から修了証書を受け取りました。

式では、寺山センター長から「今日を新たな出発点とし、特定行為を行う看護師として各自の病院などで活躍していただきたい」と激励の挨拶がありました。また、研修生を代表して県立久慈病院の十文字晴美さん（写真）は「病状の回復とQOL（生活の質）向上に向けて医療チームがベストを尽くせるよう、研修で修得した能力をもとに看護の専門性を発揮したい」と決意を述べました。



アイバンク街頭PR活動が行われました

9月1日（土）、イオン盛岡南ショッピングセンターにおいて、アイバンク街頭PR活動が行われました。

当日は、PRポスターやパネル展示のスペースが設けられ、本学教職員並びに関係団体の方々31名が2,000枚のパンフレット等を配布し、アイバンクへの登録を呼びかけました。

アイバンクの機能を十分に発揮するためには、多くの角膜提供登録が必要であり、本学附属病院においても多数の患者さんが角膜移植を待ち望んでいます。登録をご希望の方は、病院事務部病院総務課内のアイバンク事務局（内線3122）までお問い合わせください。



平成30年度岩手医科大学 秋季卒業式が行われました

9月11日（火）午前10時から、矢巾キャンパス大堀記念講堂において、平成30年度岩手医科大学秋季卒業式が挙行されました。



式では、薬学部卒業生33名一人ひとりに祖父江学長から卒業証書・学位記が授与されました。卒業生に対し祖父江学長は「患者さんやご家族の痛みを理解する優しい医療人になってもらいたい」と述べ、小川理事長からは「今後は国民の皆さんの期待に応えるべく、大いに自らを磨き、素晴らしい薬学部卒業生となり、国や病める人たちのために貢献してほしい」と激励の言葉がありました。



メンタルヘルス・ファーストエイド・ジャパン研修会が行われました

9月13日（木）から16日（日）の4日間、矢巾キャンパス災害時地域医療支援教育センター1階研修室において、岩手県こころのケアセンターの主催でメンタルヘルス・ファーストエイド・ジャパン研修会が行われ、県内外から55名が参加しました。



講義を行う大塚教授

メンタルヘルス・ファーストエイドとは、メンタルヘルスの問題を有する人に対して、適切な初期支援を行う5つのステップからなる行動計画で、オーストラリアで開発されました。日本では本学医学部神経精神科学講座の大塚耕太郎教授らのメンバーにより導入され、大塚教授は日本事務局であるメンタルヘルス・ファーストエイド・ジャパンの代表を務めています。

研修会は実施者研修と指導者研修の2部で構成されました。実施者研修では、地域の精神保健や被災者支援における適切な初期支援方法を学び、指導者研修では、実施者研修で修得した技法を地域の一般住民に広める中心的な役割を担う人材養成を目的とし、演習の進め方やレクチャー方法の習得を目指しました。

今回の研修では、沿岸被災地など各地域で活動している方を中心に、看護師、保健師、臨床心理士、医師、行政・事務職員、医学生などが集まり、様々な立場からディスカッションが行われ、充実した研修となりました。



グループディスカッションの様子

復興庁の復興推進委員との意見交換会が行われました

9月19日（水）、創立60周年記念館10階会議室において、復興庁設置の復興推進委員会から中田スウラ委員、中田俊彦委員、若菜千穂委員の3名、また、復興庁から末宗徹郎統括官、水本圭祐参事官、内田幸雄岩手復興局長らが来学され、祖父江学長、酒井岩手県こころのケアセンター長、大塚同副センター長、赤平特命助教（災害・地域精神医学講座）らとの被災地の心のケア活動に関する意見交換会が行われました。



前列左から：祖父江学長、酒井センター長、大塚副センター長、赤平特命助教

当日は祖父江学長より、本学ではこころのケアを全身全霊で取り組んできたことが述べられ、酒井センター長は、大災害後のこころのケアは中長期的に継続していくことが必要であると話されました。引き続き、大塚副センター長がこころのケアセンターの活動や現状に関する説明を行い、委員からは支援方法や人材養成などに関する質問・意見が寄せられました。大塚副センター長は「心のケアに関する活動が継続できるよう応援していただきたい」と呼びかけました。



前列左から：水本参事官、末宗統括官、中田俊彦委員、中田スウラ委員、若菜委員、内田岩手復興局長



外科学講座 天野 怜 研究員が第175回東北外科集談会において 会長賞を受賞しました

この度、2018年6月23日に仙台で開催された第175回東北外科集談会において、会長賞を受賞しました。今回発表した演題は「当院の小腸イレウスに対する緊急腹腔鏡手術の検討」で、絞扼性イレウスなどの小腸イレウスに対する腹腔鏡手術成績を検討し、有用性・安全性について発表しました。当講座における腹腔鏡下手術については国内外でも評価が高く、その業績について発表できたことは光栄に思っております。現在、私は関連施設である能代厚生医療センターに長期出張中ですが、大学病院以外でも同レベルで腹腔鏡下手術を施行できることが評価されたと考えています。今後も各領域の腹腔鏡下手術の習得に努めると共に、技術発展のために積極的な発信ができればと考えております。受賞にあたりご指導をいただいた岩手医科大学外科学講座の佐々木章教授、能代厚生医療センターの加藤久仁之先生、ご協力いただいた皆様方に感謝申し上げます。

(文責：天野 怜)



医学研究科1年 屋成 信吾さんが第43回日本外科系連合学会学術集会 研修医セッションにおいて優秀演題賞を受賞しました

この度、2018年6月21日から23日に東京で開催された第43回日本外科系連合学会学術集会の研修医セッションにおいて優秀演題賞を受賞しました。今回発表した演題は「複数他臓器浸潤をきたした虫垂粘液癌の1例」で、虫垂粘液癌の複数遠隔他臓器浸潤の報告例が少数であり、骨盤内臓全摘術を施行した報告例が本症例のみであったことを報告しました。スライド作成の工夫と発表練習を十分に行ったこと、また、座長や会場からの質問に返答できたことが評価されたと考えています。今後も積極的に国内・国際学会で発表を続けていきたいと思えます。受賞にあたりご指導をいただいた岩手医科大学外科学講座の佐々木章教授、八戸赤十字病院外科の藤澤健太郎先生、ご協力いただいた皆様方に感謝申し上げます。

(文責：屋成 信吾)



(左から：竹田会長、屋成さん)

大学報原稿募集

岩手医科大学報は、教職員皆様のコミュニケーションの場として発行を重ねていますが、さらなる教職員同士の“活発な意見交換の場”として原稿を募集しています。

岩手医科大学に対する意見や提言、日々の業務で感じること、サークル紹介、学報への感想など、幅広くお受けします(表紙写真も募集しています)。

また、特集してほしいテーマや、各コーナー(「表彰の栄誉」「トピックス」「教職員レター」など)への掲載依頼などお待ちしております。事務局までご連絡ください。

連絡先

大学報事務局(企画部企画調整課)
内線 7022、7023
kikaku@j.iwate-med.ac.jp

新任教授の紹介

平成30年9月1日就任

内科学講座腎・高血圧内科分野

旭 浩一 (あさひ こういち)

昭和41年10月14日生
福島県郡山市出身



研究テーマ

- ・進行性腎疾患の診断と治療、生体内レドックス制御と病態、生活習慣病ならびに慢性腎臓病の疫学

主な著書論文

- ・一酸化窒素の尿毒症血清における糖化終末産物形成の抑制機序 (Kidney International 2000; 58: 1780-1787.)
- ・ステロイド療法によるIgA腎症におけるメサンジウム基質蓄積軽減効果 (Nephrol Dial Transplant 2003; 18: 1311-1315.)
- ・日本人一般住民集団における長期的血圧変動と糖尿病、慢性腎臓病新規発症の関連 (Hypertension 2015; 66: 30-36.)

趣味

クラシック音楽鑑賞

教職員への自己PR

この度、内科学講座腎・高血圧内科分野の教授を拝命いたしました。腎臓内科は検尿異常に始まり各種の進行性・難治性腎疾患、全身性疾患に伴う急性・慢性の腎障害、血圧異常、水・電解質異常、腎不全医療等を基本診療領域とします。専門性とともに広汎な診療科・職種横断的な連携構築が不可欠です。私はこれに対応しうる全人的診療の素養を備えた人材の育成、臨床的疑問に立脚した研究活動の推進、地域の腎疾患に対する医療供給体制や重症化予防のための連携体制の整備と充実に貢献したいと思います。皆様のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

経歴

平成4年	福島県立医科大学 医学部 卒業
	福島県立医科大学 医学部 内科学第三講座
	東海大学 総合医学研究所 分子病態学部門 (黒川清教授) 研究員
平成9年	福島県立医科大学 医学部 内科学第三講座 助手
平成12年	福島県立会津総合病院 内科 科長
平成17年	福島県立医科大学 医学部 腎臓高血圧・糖尿病内分泌代謝内科学講座 講師
平成22年	同 慢性腎臓病(CKD)病態治療学講座 准教授
平成24年	同 生活習慣病・慢性腎臓病(CKD)病態治療学講座 特任教授
平成27年	同 生活習慣病・慢性腎臓病(CKD)病態治療学講座 特任教授
平成30年9月	現職

平成30年9月1日就任

地域包括ケア講座

宮本 郁子 (みやもと いুকこ)

昭和26年7月2日生
岡山県美作市出身



研究テーマ

- ・地域看護学、医療的ケア児の支援、自治体の行財政

主な著書論文

- ・訪問看護ステーションにおける看護師の裁量権の拡大に関する研究 (2006年3月、社団法人日本看護協会)
- ・新版 保健師業務要覧第2版 (共著 2008年10月、日本看護協会出版会)
- ・市民からみた立川市の財政 (2015年12月、たちかわ・財政を考える会)

趣味

読書・音楽 (オカリナなどの演奏)

教職員への自己PR

このたび、地域包括ケア講座を担当させていただくこととなりました。これまで地域看護学領域での実践、教育、研究に従事してまいりましたが、これからは特に、在宅看護学を中心に経験を教育に活かしてまいります。皆様方のご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

経歴

昭和49年	名古屋保健衛生大学 衛生学部 衛生看護学科 卒業
昭和49年	川崎医科大学附属病院 看護師
昭和51年	東海大学附属病院 看護師
昭和56年	東京都国分寺市役所 保健師
平成10年	東邦大学医療短期大学 専攻科 地域看護学専攻 講師
平成13年	法政大学 大学院社会科学部 政治学専攻 修士課程修了
平成14年	東邦大学 医学部 看護学科 講師
平成15年	足利短期大学 看護学科 助教授
平成18年	国立大学法人 秋田大学 医学部 保健学科 看護学専攻 地域・老年看護学分野 教授
平成21年	帝京平成大学 ヒューマンケア学部 看護学科 地域看護学 教授
平成30年9月	現職

平成30年9月1日就任

情報科学科医用工学分野

高橋 史朗 (たかはし ふみあき)

昭和47年3月7日生
東京都八王子市出身



研究テーマ

- ・予測モデルの構築と評価、医学研究デザインおよび医学データに対する統計解析手法

主な著書論文

- ・子宮体がんハイリスク群に対する補助化学療法を比較する無作為化比較試験 (BMJ 投稿中)
- ・進行再発胃癌に対する化学療法を比較する無作為化比較試験 (Eur. J. Cancer 2014; 50:941-50)
- ・進行再発卵巣がんに対する化学療法を比較する無作為化比較試験 (Lancet 2009; 374:1331-1338)

趣味

温泉旅行

教職員への自己PR

このたび、教養教育センター情報科学科の教授を拝命いたしました。これまでの経験を生かして、学生や研究に携わる先生方の統計リテラシーおよび臨床研究リテラシーの向上に貢献したいと考えております。また、学内関連部門の先生方と力を合わせ、高品質な臨床研究を実施し、今まで以上に高いエビデンスを本学から発信するとともに、患者さんによりよい医療を早く提供したいと考えております。

経歴

平成9年	東京理科大学大学院工学研究科 修士課程 修了
	協和発酵工業株式会社 医薬開発本部 統計解析室
平成15年	北里大学大学院薬学研究科 博士課程 修了
	北里大学薬学部 講師
平成19年	ハーバード大学公衆衛生大学院 生物統計学 滞在研究員
平成26年	東北大学病院 臨床研究推進センター 特任准教授
平成28年	同 臨床試験データセンター 兼務
平成30年9月	現職

岩手医科大学募金状況報告

【創立120周年記念事業募金】

岩手医科大学創立120周年記念事業募金に対し、特段のご理解とご支援を賜りました皆様方お一人おひとりに、厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

今後とも格別なるご支援・ご協力を賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。

今回は第24回目の御芳名紹介です。(平成30年7月1日～平成30年8月31日)

※御芳名及び寄付金額は、広報を希望されない方は掲載しておりません。

●法人・団体等（4件）

<20,000,000>

株式会社 こずかたサービス（岩手県盛岡市）

<11,275,000>

圭陵会 水沢支部（岩手県奥州市）

<2,000,000>

岩手医科大学 眼科同窓会（岩手県盛岡市）

<500,000>

医療法人 弘生会（熊本県熊本市）

●個人（9件）

<2,000,000>

小川 彰（役員）

<1,000,000>

天神 尚子（父母）

塚原 智典（医51）

<500,000>

塚原 正典（医19）

<300,000>

佐藤 満生（医22）

<御芳名のみ掲載>

大島 里香子（医46）

鈴木 教市（一般）

佐藤 崇文（父母）

斎藤 純一（歯11）

区 分	申込件数	寄付金額（円）
圭 陵 会	731	497,105,089
在 学 生 ご 父 母	556	291,280,000
役員・名誉教授	75	98,020,000
教 職 員	182	25,862,000
一 般	81	29,740,000
法 人 ・ 団 体	265	846,768,000
合 計	1,890	1,788,775,089

(平成30年8月31日現在)

省エネ推進委員会だより

【夏季の節電活動】の結果報告について

職員の皆様方におかれましては、日頃より省エネ活動にご協力をいただきまして誠にありがとうございます。

今夏も「夏季の節電活動」を行い、期間内における電力使用量をとりまとめましたので集計結果についてお知らせいたします。

【夏季の節電活動】概要

【実践期間】

平成30年6月1日～8月31日まで（クールビズは9月30日まで）

【節電目標】

実践期間内の消費電力量（合計）の前年度比1%の削減

【実践項目】

冷房温度28℃設定（病棟・診察室等は弱冷房の励行）、不要照明の消灯、待機電力の削減、クールビズ活動。

まとめと考察

今夏は、花巻温泉病院が前年度電力使用量1%削減の目標を達成しました。大きな要因として、昨年度末に3階病棟を閉鎖したことがあげられます。

全体の傾向として、例年と比較して6月～8月の気温が全て高く、冷房機器の負荷や運転時間が増えたことから、昨年と比較して電力使用量が増加しました。

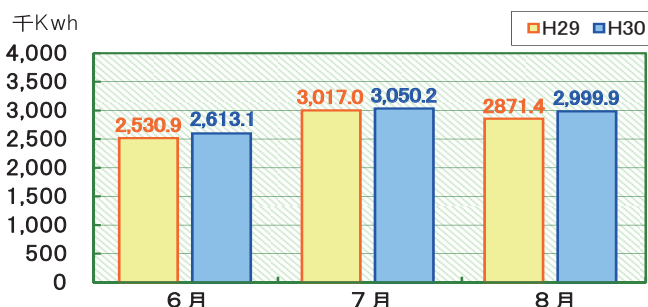
全体の結果として、目標である前年度比1%の電気使用量削減は、達成できませんでした。

来年度からは、既存設備の他に矢巾新病院も稼働することから、電力使用量の増加が見込まれますので、今後も引き続き省エネ活動のご協力をお願いいたします。

施設別電力使用量集計（単位：千Kwh）

施設名	期間の合計	（前年度比）
内 丸	5,603.8	(+3.5%)
矢 巾	2,696.8	(+2.4%)
本 町	58.6	(+2.4%)
花 巻	156.4	(-5.4%)
P E T	128.8	(-0.9%)
医療専	18.8	(+3.6%)
施設合計	8,663.2	(+2.9%)

電力使用量の推移（月毎の施設合計量）



シリーズ 職場めぐり

No.128

看護部 (西6階B病棟)

私たちの病棟は口腔外科と麻酔科の混合病棟です。病床数は47床で、看護師27名、看護補助者3名、クレーク1名でお互いを尊重し合い働いています。歯科医療センターの口腔外科、障がい者歯科での診療にも携わっており、外来診療にも従事しています。

部署理念は、やさしさと思いやりの心をもち、「食べること」「話すこと」を大切にし、患者さんの気持ちに配慮した看護を提供することです。小児から高齢者、障がいを持つ様々な対象の患者さんに関わっており、より患者さんの意向に沿えるような看護を提供するため、医師・歯科医師・看護師・栄養士・薬剤師・看護学生と共にカンファレンスを開催し、連携を図っています。口腔外科疾患の患者さんに限らず多くの診療科の患者さんを受け入れる機会があり、様々な疾患の学習や技術の向上を図り、看護観を構築しながら主体的に行動できるスタッフを育成しています。「目配り」「気配

り」「心配り」「手配り」をモットーに、治療がスムーズに進み、患者さんが安心して治療に専念できる環境を整え、今後も看護の提供を行っていききたいと思います。

(主任看護師 瀬川 智浩)



《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰	佐藤真結美
影山 雄太	菊池 初子
松政 正俊	工藤 正樹
齋野 朝幸	熊谷 佑子
藤本 康之	安保 淳一
白石 博久	佐々木忠司
成田 欣弥	畠山 正充
遊田由希子	藤村 尚子
佐藤 仁	武藤千恵子
小坂 未来	高橋 慶
藤澤 美穂	

編集後記

今回の特集では2016年の認定看護師の紹介に引き続き、薬剤師と栄養士の医療系認定資格取得者について紹介しました。当院では高い専門性を有した医療スタッフが、各チームで活動しています。多職種の方々が協力し、質の高い医療を提供しているのがわかります。

他にもたくさん医療系認定資格取得者が在籍しておりますので、自分も日々研鑽せねばと思いつつ、多くの方々といっしょに仕事ができることを楽しみにしています。

(編集委員 工藤 正樹)

岩手医科大学報 第505号

発行年月日 平成30年10月31日

発行 学校法人岩手医科大学

編集委員長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL. 019-651-5111 (内線7023)

FAX. 019-624-1231

E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL. 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp

スポット薬学講座

薬科学講座天然物化学分野 准教授 林 宏明



中央アジアのタジキスタンにおける漢方薬の原料植物の調査研究

漢方薬の有効性評価の進展とともに漢方薬の使用は拡大しており、その原料として使用される生薬の需要も増大しています。一方で、これらの生薬の多くは中国からの輸入に頼っており、中国の急速な発展に伴う使用量の増加や産地の環境破壊により、漢方薬の原料生薬の確保が重要な課題になっています。

麻黄は、風邪やインフルエンザに用いられる葛根湯や麻黄湯、鼻炎に用いられる小青竜湯、肥満症に用いられる防風通聖散などの漢方薬に使用される生薬で、年間500トン程度使用される全量を中国からの輸入に頼っています。

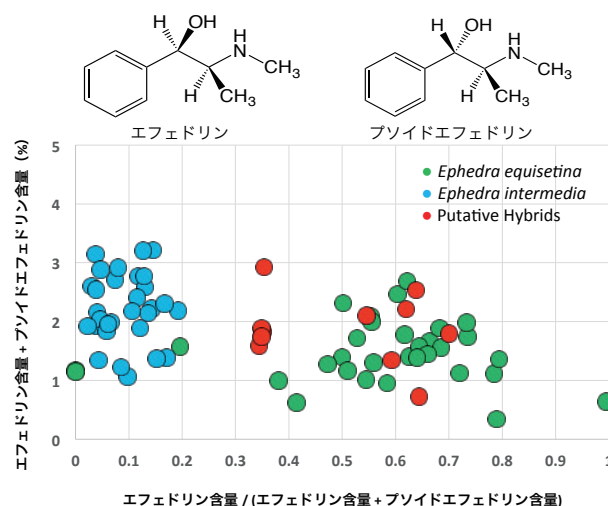
筆者は、国際協力機構（JICA）と日本学術振興会（JSPS）が協力して実施した科学技術研究員派遣制度により、中央アジアのタジキスタンに滞在し、麻黄の原料植物である *Ephedra equisetina* や *Ephedra intermedia* の自生地を調査する機会を得ました。

これら2種のマオウ属植物は日本薬局方で規定されている麻黄の基原植物であり、日本国内で漢方薬の原料として使用することができます。麻黄の有効成分であるエフェドリンやプソイドエフェドリンは交感神経興奮作用を持ち、気管支拡張薬として風邪薬に配合される医薬品でもあります。

タジキスタンが旧ソ連の構成共和国だった時代には、麻黄を収穫して旧ソ連国内で医薬品原料として使用されるとともに、生薬として日本に輸出されていました。しかし、タジキスタンでは旧ソ連の崩壊後の内戦の混乱もあり、現在では麻黄は全く利用されていません。タジキスタンの調査で採集したマオウ属植物は、種間や系統間で大きな成分変異があり、エフェドリンとプソイドエフェドリンの含量比が大きく異なっていました。エフェドリンよりも抗炎症作用が強いとされるプソイドエフェドリンを多く含有する *Ephedra intermedia* は、鼻炎に用いられる小青竜湯の原料として期待されていますが、現在の中国国内の資源量から使用されていません。また、麻黄の新たな有効成分として注目されているフラボノイド成分に関しても、大きな成分変異が系統間に存在することが私たちの調査で明らかになりました。

漢方薬に用いる麻黄はどのような麻黄が良いのか？栽培による麻黄資源の確保とともに、漢方薬原料としての新しい品種の確立を目指して研究を進めています。

タジキスタンで採集したマオウ属植物のエフェドリン類の含量

*Ephedra equisetina**Ephedra intermedia*